

このような場所で、シラヒゲウニの幼生は多く着底し、生育するものと推定される。

D 消化管内容物

アジモ場に生息しているウニの消化管内容物はほとんどアジモであり、しかも消化管ははち切れんばかりに飽食している。これに対し、このようなアジモあるいは大型海藻が少ない砂礫帯や岩場のウニの消化管内容物は一般に容量も少なく、砂泥様物質の中にイトクズグサ等の細片の混入がみられるにすぎない。

6 まとめ

- 1) この海域を外洋から区分する礁原の高さは0 mのレベルにあって、波の影響力を著しく減衰させており、また礁縁および礁内に点在する島々によって水路および boat channelより海岸線に至る一帯すなわち潮干帯は一層おだやかになっている。

この海域の地形上の特徴として、前述のように静かな内海域を有しながら、そこはほとんど干潟になっていることがあげられる。

漁業生産上、干潟がどのような役割りを果しているか、究明を要する問題点である。

- 2) 海岸線に近い砂質帯には粘土分が多く陸土の影響が強い。それに続くアジモ場にはウラキツキガイやクロチョウガイの生息が確認されていて、アジモ場には陸土の影響はあまりおよんでいないと推定できる。

しかし礁湖におけるサンゴのへい死原因として、オニヒトデ以外の非生物要因も完全に否定されているわけではない。砂質帯に影響のみられる赤土(陸土)が、それより沖側の漁場環境にどのような影響をおよぼすかは今後の研究にまたねばならない。

- 3) 本県沿岸域の珊瑚礁内海域における海水や底土についての化学分析はこれまでなかったが、この調査によっておおよその目安としての測定値が得られた。
- 4) 海藻類52種と水生顕花植物6種の生育が明らかにされた。この海域にはラップモクはわずかにみられるが、ホンダワラ等の比較的大形の褐藻はほとんどない。周年をとおして量的に多いのはアジモである。

アジモは強じんな根茎を有して地盤に適度の安定性を与え、自らにとってもまた底生動物などに対しても良好な生育環境をつくっていると考えられる。

- 5) 礁湖(サンゴ帯)内にモズクが生育してないことについて、その主要因は海水の流動が大きいことと関係が強いと推定されるが、詳しく究明する必要がある。シラヒゲウニの餌料としてのアジモの有効性を確かめることが必要であり、餌料環境を改善(アジモ場造成)することによって、増殖の目的を達成できる可能性が大きいと考えられる。